



## 優秀賞

書評 佐治晴夫著『夢みる科学』（玉川大学出版部 2006）

（中央開架：404.9/14//H ）

情報コミュニケーション学部 4年 高木 玲

著者風というならば、ピアノッシモからメツォフォルテに深まってきた秋の夜。窓を開けて夜空を見上げた。昔から理系の分野を毛嫌いしていた私が、本書で科学や宇宙のロマンに心を抱きしめられ、読後、導かれるように星々を見つめていたのだ。

本書は物理学、宇宙論の専門家である「すぷーん先生」こと、佐治晴夫氏による短編エッセイ集である。エッセイは天体や感性の話など一つのテーマにつき2ページ程度で、毎話、筆者の様々な体験談から話は始まる。また、本書の特徴は「初冬の静かな公園の片隅で、枯葉に埋もれた日時計が、見えない時を刻んでいます。」(p.86)といったような四季の彩りを表現した詩的な書き出しなどのロマンチックな文章にある。そして科学の本でありながら数字も記号も一切出てこない。したがって、基礎知識も一切必要ない。その点が本書の親しみやすさの最大の要因だろう。

読者は唯々、著者の豊かな感性と生活の中から身近に説かれる科学の魅力に身を任せるだけで、知識とやすらぎにうっとり浸ることができる。

「人はなぜ人の形をしているのでしょうか。」「人の形 宇宙がデザイン」(p.81-83)ですぷーん先生が読者に問いかける。平易にまとめると、まず、骨格の大きさや形は、地球の大きさと深く関わっている。骨格に作用する地球からの引力が大きすぎると骨格が壊れてしまうのだ。また、空気が凍って個体になったり、液体になったのでは呼吸ができない。したがって、空気の分子を引き止める引力と、地上の環境温度が人の形をデザインしたのである。

まさに人の形というのは地球の重さと大きさ、また、太陽との絶妙な距離の賜物なのだ。少しでも地球のサイズと太陽の位置が違ったら、エイリアンのような形だったかもしれない。つまり、私たちは宇宙がデザインした宇宙の一部である。

このエッセイの最後にすぷーん先生は「言い換えれば、あなたの存在が宇宙を存在させているともいっていいかもしれませんね」と語ってくれている。こういった温もりの込められた言葉は、誰もが今日を生きる一助となるのではないだろうか。このエッセイからも垣間見えるように一つのテーマから頭と心に優しく語りかけてくれる。それが本書の魅力なのである。

読後、導かれるように星々をみつめた。宇宙の事を思いながら夜空を見上げたのは初めてかもしれない。テレビからシリアの内紛のニュースが聞こえてくる。本書を読んだばかりの私はやるせなさにも包まれた。たった今、宇宙論から人間という奇蹟や命の尊さを教わったからである。だからこそ教育、科学を通して多くの豊かな感性を伝えられる人が世界にはもっと必要なのだ。そう、例えば、すぷーん先生のような。